

【開催報告】

第10回祥明大・熊本県立大学学術フォーラム 底流としての異文化 ―その発現と発掘―

米谷 隆史

1989年10月に締結された本学と祥明大との姉妹校関係は本年度で28年目を迎えた。両校の交流は、「熊本県立大学」という名前よりも長い歴史を有するのである。熊本女子大学時代から数えた本学の創立70周年、本学術フォーラムの第10回をそれぞれ記念しての今回、その冒頭は、「祥明大・熊本県立大学姉妹校締結の歴史」と題して両校の交流の記憶を、当時のいきさつを良く知る金尚珍先生（祥明大元教授）と本学の馬場良二教授が語るというものであった。

金先生はご高齢ゆえ来日は叶わなかったものの、当時の思い出を語るビデオメッセージを寄せてくださった。先生は、交流草創期に関わった方々の名前や、その懐かしい思い出をゆっくりと語ってくださったが、中でも、28年前、祥明女子大初回の研修団参加学生達の到着前の緊張と到着後の安堵、研修を終えての帰国時の万感迫る思いに関するくだりは印象深く感じられた。その思いは、おそらく本学からの初の研修団学生達も等しく憶えた感慨であったはずである。筆者（米谷）は同じ頃に地方都市の数百人が住む学生寮で大学生活を送っていたが、北南米や東西欧、南アジア、アフリカも一部であれば、その渡航は既にありふれていた時代でありながら、隣国に赴いた経験がある知人は指折り数えるほどであったことを今、思い出す。金先生は結びに「山河が無数に変わっても、両校の関係は変わることなく」との言葉で両校の絆を寿いでくださったが、来場者一同、等しくその思いをかみしめたことであった。

これを受けて、馬場教授は、本学の日本語教育研究室の歩みが両校の交流とともに進んできた経緯を語った。韓国からの短期研修団向けの日本語学習プログラムの作成、学生の祥明大における日本語教育実習、さらには、本学修了生の祥明大日本語教師としての赴任まで、研究室の一步一步の発展が、自身の教員・研究者としての経験の蓄積でもあったことへの感謝を伝えるものであった。

28年に亘る交流の歴史を、当初から知る者は本学でも数えるほどとなっている。今回、こうした機会を得て両校それぞれの目が見た光景の一つ一つを振り返ることができたことは幸いであった。金尚珍先生とビデオをご準備いただいた祥明大関係各位に、厚く御礼を申し上げます。

第10回を迎えた今回の学術フォーラムのテーマは、「底流としての異文化—その発現と発掘—」である。講演に早稲田大学の笹原宏之教授、小報告に両校の研究者各2名が登壇し、それぞれの立場から文化の重層性を見つめ、その多様性がもたらす豊かさと厳しさ、そして研究上の面白さを提起した（金裕千氏は都合により欠席のため、本学大学院生の津々見彩氏が代読）。テーマは下記の通りで、時代と地域だけでなく、その分野と手法もバリエーションに富む。各人の要旨を末に引用した。一覧を乞う。

【講演】 漢字文化に見られる重層性 —日本の漢字を中心に—

笹原 宏之（早稲田大学教授）

【小報告】

1. 平安文学に見られる古代韓国のイメージと表現

—「高麗」「百濟」「新羅」を中心に—

金 裕千（祥明大 schools 教授）

2. キリシタン版『日葡辞書』と九州の古辞書

米谷 隆史（熊本県立大学教授）

3. 韓国における石川啄木

梁 東国（祥明大 schools 教授）

4. 北米のアジア系女性作家による新たな空間からの語り

—オリエンタリズムへの挑戦と多様性の促進—

原 紘子（熊本県立大学講師）

【質疑応答】

冒頭に両校以外の研究者による基調的な講演を配する試みは今回が初めてであった。笹原教授の漢字を見つめる視野は東アジア全般だけでなく、西欧における漢字認識までを覆っているが、一方で、「卵」と「玉子」のような日本国内における感覚的な漢字の使い分けから、熊本県の地名に見える国字「襲」「梲」「嫩」の存在に至るまで、もっと知りたいと思わせる現象を自在に披露する様子は、時空間両用のズームレンズを駆使するかの如く。日本の漢字に見える「重層性」は、これまで専ら呉音・漢音・唐音といった漢字音の複数層の存在を述べる際に言

われることであったが、字音だけではなく、日本における漢字の用法そのものにも、大陸における史的变化が層をなして伝存している様相を理解することができた。

講演、小報告とも熱のこもった内容で、やや予定時間を超過したが、その後の質疑も充実したものとなった。登壇者相互の質疑のやりとりが見られただけでなく、学生を中心とするフロアからの質問も単なる内容確認に止まらぬ、研究上の新しい議論を巻き起こす萌芽となるものであったことは特筆されよう。筆者の関心に引きつけて1つだけ記すならば、「日本において早い段階で仮名が発達したことが漢字の一字多訓を支える結果になったのではないか」、という問いは、その因果関係を今後丁寧に解きほぐす必要を感じさせた。

冒頭の馬場教授の語りの中では、共同学術フォーラムは姉妹校締結後すぐに小規模な開催を見たが、以降は中断したまま時間が過ぎたこと、そして、この10年は文学部が中心的な役割を果たしつつ定期開催が続くに至っていることが触れられていた。第10回の学術フォーラムは、本フォーラムの企画・開催自体が、既に両校の学術発展を促す底流の一つになっていることを再確認する時間でもあったといえよう。

最後に、文字通りの後日譚を一つ。学術フォーラムの翌日、登壇者のうち笹原・梁・米谷の3名は、冷たい小雨の中、熊本県の宇城市から美里町にかけての国道218号線の脇道を本学のレイヴィン教授が運転するレンタカーで（本当に）うろついていた。田んぼの用水路のような小河川の土手に敷かれた細い農道を大人4人が乗った自動車がゆっくりとさかのぼって行く。橋を見つけるたびに全員が傘もささずに降りて、小走りに親柱を確認してはガッカリを繰り返すこと3度。4度目の小走りで遂に出会ったのが、国字「襲」を含む河川名「襲川（いやがわ）」のプレートであった。その後、美里町に入って、バス停に「柵（かこい）」も発見。満ち足りた晩秋の休日となった。

【講演】

漢字文化に見られる重層性—日本の漢字を中心に—

笹原 宏之（早稲田大学）

東アジアの広大な地域の中で、漢字は、文字としての長い歴史とともに変化を続けてきた。それによって書き表される中国や韓国、ベトナム、そして日本などの言語、社会、文化事象なども、絶えず変容し、また新たに生まれるために、漢字の用法や熟語にも変質と新出が繰り返されてきた。

日本は、中国や韓国から伝来した漢字とそれによって書き表され、表現され

るさまざまな文化を受容した。そして、早くからそれらの国々に倣い、あるいは独自に、漢字文化への応用を加えてきた。日本列島は、おおむね縄文文化を基底にもつが、有史以降、そうして大陸、半島の先進的な文化を、漢語・漢字とともに断続的に受け入れ、それらを消化吸収しかつ融合し、多様化させてきたのである。そうした中で、国風文化、院政期文化、鎌倉文化、室町文化など、日本の特質が横溢する多彩な文化を構築したわけであるが、そこには必ずといっていいほど常に文字、特に漢字が深い関わりを呈している。

戦国時代、安土桃山時代からは、西洋から舶来した南蛮文化の導入にも努め、鎖国の時代にあっても、蘭学としてそれを取り込み続け、元禄文化、爛熟した化政文化を経て、近代以降は、再び西欧の諸文化を積極的に受容した。そうした際にも、漢字が本来的にもつ情報の凝縮力と表現力を、時代と社会、文化のうねりに合わせて最大限に発揮させてきた。

漢字文化は、古い事象が新しい事象に上書きされ、そうして最新のものだけが日常生活に残る、という一元化の傾向が中国や韓国、ベトナムなど漢字圏では随所に見られる。中国では、漢字文化における多様性は、むしろ「面」つまり地理的な広がりにおいて見いだせるケースが多いと考えられる。一方、国土が比較的狭隘な日本では、歴史的に古く下層にある底流から古い事柄が現代まで滲出している。そうした透過性を備えた重層性を呈する傾向が、日本の漢字文化の各方面に指摘しうる。そこにさらに用法差、位相差が別に層を形成するところに、日本の漢字の特質があるといえないだろうか。情報化、国際化が進むなかで、こうした多層化の状況はさらに相互的な影響を生み出していくことであろう。

【小報告】

平安文学に見られる古代韓国のイメージと表現―「高麗」「百濟」「新羅」を中心に―

金 裕千 (祥明大 学校)

いわゆる国風文化の形成される平安時代の文学においては、以前の時代に比べ古代韓国との関係が語られることがあまりない。そんな中、いくつかの作品に「高麗」「百濟」「新羅」の語が見えることが注目される。「百濟」(紀元前18～660年)や「新羅」(紀元前57～935年)に対し、「高麗」とは、高句麗(紀元前37～668年)、渤海(698～926年)、高麗(918～1392年)の三国を指す名称であるが、平安文学に見える「高麗」は、高句麗、高句麗と百濟・新羅を含めた古代韓半島、そして渤海を言う場合が多い。これら古代韓国を指す語は、そのほとんどが『うつほ物語』や『源氏物語』を中心とする物語作品と、

説話文学である『今昔物語集』に登場する。物語では「高麗」の用例が多く、「百濟」「新羅」の用例は比較的少ない。「高麗」は、「高麗楽」などの舞楽関連、「高麗錦」などの文物関連、「高麗人」など渤海や渤海使を指すものとして登場する。「百濟」は用例が最も少なく、「百濟藍」という舶来の色や、仏教伝来と関わって聖徳太子伝説とともに語られたりしている。「新羅」は、「唐土」とともに世界をなす異国の意として用いられ、「新羅の飾り」など豪華な舶来品として語られる。一方、『今昔物語集』では、「高麗」のみならず「百濟」「新羅」関連が物語作品に比べ多く見える。「高麗僧」「百濟僧」「新羅僧」や聖徳太子伝説関連をはじめとして、仏教との関わりや説話的な興味からこれらの語が登場している。

本発表では、平安時代の物語と説話を中心に「高麗」「百濟」「新羅」関連の表現がどのようにイメージされ、また作品世界の形成に関わっているのかを分析し、それを通して平安文学における古代韓国の位相について考えてみたい。

キリシタン版『日葡辞書』と九州の古辞書

米谷 隆史（熊本県立大学）

16世紀末から17世紀初めにかけて天草や長崎等で刊行されたキリシタン版の書物は、当時の日本語を知る上での重要な資料である。なかでも、日本語の文法書たる『日本大文典』や対訳辞書の『羅葡日対訳辞書』・『日葡辞書』は、九州方言に関する記録を含み、文献上の証拠に乏しい当該期の九州の言語状況を推定する際の基本的指標の一つとなっている。

例えば『日葡辞書』の場合、語釈の末に「X」（Ximo = 下）の符号を付すなどして当該の語が九州方言であることを明示するが、さらに、この符号が見えない語の中にも九州方言と推定される語が少なからず存することが指摘されている。後者のような例が存在する原因は、編纂に当たった日本人修道士に九州出身者が多かったことで、方言か否かの峻別が十分に果たされなかったためとされており、ここに、九州方言話者が携わった辞書編纂の一局面をみることができる。翻って、九州方言話者が編集に携わった辞書は当然『日葡辞書』だけではない。薩摩版や日向版の『聚分韻略』や慶応義塾図書館蔵の『色葉集』（仮題）のように、同時代の九州で刊行・書写された辞書は現在もいくつか伝存しており、それらの中には九州方言が記載されているものも見られるのである。

本報告では、九州の古辞書の中に『日葡辞書』等の方言記録を補完する記述が存することを確認した上で、『日葡辞書』の編纂を、キリシタンによる特殊な文化的達成としてだけでなく、九州における辞書編纂の史上に位置づける可

能性について言及することとする。

韓国における石川啄木

梁 東国（祥明大學校）

本発表では、韓国近代文学の中において石川啄木からの影響と受容などの文学的実体を見てみようと思う。これは韓国の啄木についての研究や動向に関することではない。韓国近代文学の中における石川啄木、あるいはその時代と密接な関連を持つ知識人の中に、彼がどのような位置にあったのか、資料を中心に突き詰めてみることに目的がある。韓国の近代小説と近代詩、植民地時代の文学批評の中において石川啄木からの文学受容を見てみようと思う。このため、本発表では、まず、韓国近代小説のなかに実名で登場する啄木について調べてみる。朴泰遠（1909-1987）の「小説家仇甫氏の一日」に端的に登場しているが、2回の短歌の借用など、文学受容の一面を垣間見ることができる。また詩文学では、天才詩人白石（1912-1996）が啄木の詩を愛読していたことが確認できる。一方、1920年代末の李応洙の評論の中に啄木が登場するが、特別な作家説明がないことから、むしろ一般人にも広く読まれていたことを物語る。実際、当時の舞踊家で名をあげていた崔承喜（1911-1967）と、詩人であり韓国の初代比較文学会長の鄭漢模（1923-1991）なども学生時代に啄木を愛読した。

影響は、それぞれ作家の文学の受容性と柔軟性、そして芸術性の向上のためのビジョンを抱かせる創造的な行為である。これを明らかにすることは、韓国文学の同質性の獲得のための一つの模索であり、その変容から国際比較文学研究の土台が築かれていくだろう。

北米のアジア系女性作家による新たな空間からの語り

—オリエンタリズムへの挑戦と多様性の促進—

原 紘子（熊本県立大学）

アメリカとカナダの両国は、人口のほとんどが移民によって構成され、そこでは多様性を尊重し歓迎する風土が培われてきた。その一方で、国民を主流派と非主流派に区分する二分法の思考様式が存在していることも否定できない。エドワード・サイードは、オリエンタリズムの思考様式に注目し、こういった二元論的構造が文化的に再生産され続ける仕組みを明らかにした。このオリエンタリズムを背景に、メディアにより作り出された非主流派の表象が固定観念として社会に浸透してゆく現象が見られる。

本稿では、さまざまな少数派グループの中でも、アメリカとカナダにおいて「ア

ジア系」あるいは「有色」に分類される女性たちに注目する。アジア系女性作家は、その固定されたイメージから脱却するため、新たな場所からストーリーテリングを行なっているといわれる。新たな場所とはどこか。そして、そこから語るとはどういうことなのか。そういった疑問を追究するために、本稿ではホミ・K・バーバの「第三の空間」(the Third Space) の概念のトリン・T・ミンハによる解釈を用いる。新たな空間からの語り手としてのアジア系女性作家の事例を示し、彼女らが独創的な価値観を発信し、多様性の促進に貢献していることを明らかにしたい。



左から、笹原 宏之氏、梁 東国氏、原 紘子氏、筆者・馬場 良二氏